

学位授与番号	医博甲第928号
学位授与年月日	平成2年3月25日
氏名	村上 望
学位論文題目	肺癌の間質に関する免疫組織化学的研究

論文審査委員	主査	中西 功夫
	副査	岩 橋
		中 沼 安 二

内容の要旨および審査の結果の要旨

肺癌は多彩な組織像を呈し、早期に局所浸潤ならびに転移をきたすことの多い癌である。

肺癌の局所浸潤巣においては様々な程度の間質反応が認められるが、その間質反応に関与する細胞の性質、ならびに沈着する基質蛋白の性状や分布の特徴を解明することは、癌の生物学的特性を知る手がかりになると考えられる。そこで著者はヒト原発性肺癌26例、転移性肺癌3例、肺原発性平滑筋肉腫1例の30例につき、その間質の性状を型特異的抗ヒトコラーゲン抗体（I～VI型）、抗ヒトラミニン抗体、抗ヒトフィブロネクチン抗体、抗アクチン抗体を用いて免疫組織化学的に検討した。得られた成績は次のように要約される。

1. 原発性肺癌を間質の多寡により間質増生群と間質非増生群に分けて比較すると、間質増生群では非増生群に比べて、I型、III型、VI型コラーゲンとフィブロネクチンの著明な増加が認められた。また、V型コラーゲンも間質増生群においては間質細胞内に同定された。

IV型コラーゲン、ラミニンなどの基底膜成分は間質非増生群では癌細胞巣辺縁や毛細血管周囲にはほぼ連続的に存在するのに対し、間質増生群では基底膜成分は断裂し、異常分布を示した。これらの特徴に関しては肺癌の組織型による差異は認められなかった。

2. 間質の増生に伴って増殖する紡錘形の間質細胞の多くは、非特異的抗アクチン抗体に対して陽性であったが、間質増生群では平滑筋細胞に特異的な抗アクチン抗体に対しても反応陽性を示す細胞が混在していた。このことは間質形成に参画する細胞の多くは筋線維芽細胞であるが、線維増生の強い場合には平滑筋細胞も関与していることを示唆している。
3. 癒痕癌6例は、間質増生群に分類されたが、その中心性癒痕組織の性状は間質増生群と若干異なり、多量の弾性線維とVI型コラーゲンの沈着が優位を占めていた。この性状は非腫瘍性癒痕と極めて類似していた。従って癒痕癌の既存の癒痕組織を基盤にして発生する可能性が示唆された。

以上、本研究はヒト肺癌の浸潤、進展を間質反応の性状解析という側面から検討した労作であり、学位論文に値すると評価された。